ブランコ・ミラノヴィッチ『資本主義だけ残った——世界を制するシステムの未来』[1]

2021 年 10 月 2 日 絃ゼミ読書会 (担当：森田俊吾)

1　冷戦後の世界のかたち

これまで欧米が先導してきた資本主義社会による世界的格差が、アジアの台頭により再均衡化しつつある。その中で、これまでアメリカを筆頭とする欧米が進めてきたリベラル能力資本主義とは異なる、国家主導の政治的資本主義（中国）が出てきた。この 2 つのシステムでは、所得の不平等や階級構造の問題に対する対応の仕方が異なっており、この違いに目を向けることで「そのどちらのシステムのもとで私たちが暮らしたいか」を決めることになる。

> ブルジョワ階級は [...] すべての民族をして、もし滅亡したくないならば、ブルジョワ階級の生産様式を採用せざるをえなくする。（『共産党宣言』）

> ヨーロッパ人は圧倒的に強い力をもっていたため、遠方の国で、何の処罰も受けることなく、正義にもとる行動をあらゆる種類にわたってとることができた。[...] 今後、これらの国の住民はもっと強くなり、あるいはヨーロッパ人の力が弱まって、[...] はじめて、互いに恐怖心をもつようになり、一部の国の不正を抑えることができるようになり、各国が互いの権利を認めあうようになるだろう。だが、各国間の力の均衡をもたらす要因としては、各国が知識とあらゆる種類の改良を伝えあうこと以上のものはないと思える。（『国富論』）

- アダム・スミスは「すべての国が互いに広範囲な貿易」（＝グローバル資本主義）を行えば、均衡がもたらされると考えた。事実、それまで広がり続けた世界的な不平等は、2000 年以降中国はじめアジアが台頭していくにつれて、縮小している

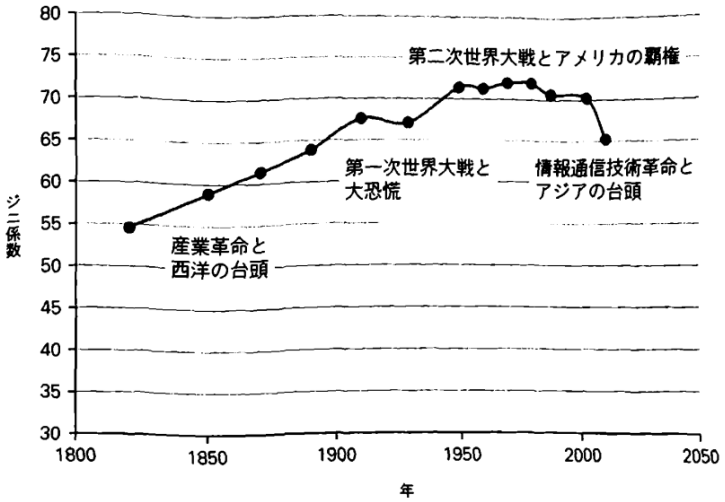


図 1-1　世界の所得不平等の推定、1820-2013 年

- アジアがグローバリゼーションに対応していく一方で、欧米ではそれに起因する格差社会への不満が募る
→1970 年代の第三世界社会の構図がそのまま逆転している

[1] 西川美樹訳、みすず書房、2021 年

2　リベラル能力資本主義

資本主義には「資本の豊富な人間は金持ち」という不変的な原則があるが、リベラル能力資本主義では、労働所得と資本所得を兼ね備えた層（ホモプルーティア）が出てくることで、より一層不平等を強化し、さらに教育への投資や相続によってその資産の移転を固定化することに成功している。

2.1　リベラル能力資本主義の特徴

資本金持ちと労働金持ち

- 古典的資本主義では、資本家は労働所得を得ることはなかった（有閑階級）
- リベラル能力資本主義では、企業幹部や医者、投資銀行家、専門職のエリートなどが賃金労働者でありながら、資本所得も得ている（ホモプルーティア）

結婚のパターン

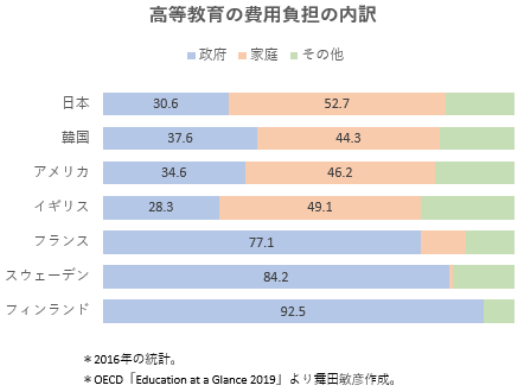
- 戦後のアメリカでは男性は似たような社会的地位集団に属する女性と結婚していたが、女性側は働き続ける可能性が低かったため、夫婦の所得が同じになる可能性は低かった
- リベラル資本主義では、金持ちで高学歴の男性ほど、金持ちで高学歴の女性と結婚する傾向にあり、結婚後も共働きになる可能性が高い

▷「釣り合った結婚という条件のもとでは、女性が労働力に加わると不平等が拡大する」(23)

不平等の世代間継承

- 資本主義社会において獲得された優位性は、次の世代（自分の子ども）に移転されることが多く、不平等は解消されにくい
- 一方、相続性が高く、教育費が納税者によって賄われる北欧やかつての社会民主主義的資本主義の時代では、こうした移転は少ない

▷ ただし、リベラル能力資本主義はきちんと働くことで収入を得る資本家が登場したことや、女性が労働力に参加できるようになったと、好ましいものと考える向きもある



2.2　システム的な不平等

リベラル能力資本主義には不平等を拡大させる要因として、システム的なものと非システム的なもの（偶発的なもの）がある

- **スキルプレミアム**（熟練労働者の非熟練労働者に対する相対賃金）は非システム的：需要と供給のバランスで生じている格差であるため、リベラル資本主義に固有のシステム的要因とは関係がない

→ 資本所得が極度に集中し、もっぱら金持ちがそれを受領する構造はシステム的なもの

- ほとんどの国で資本所得は不平等に分配され、その不平等の拡大は増大していく（ただし、台湾では労働所得と資本所得の分配が平等になっている）

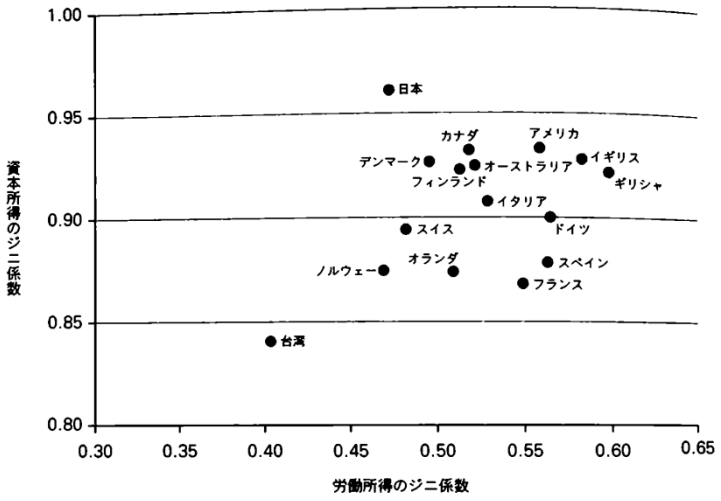


図 2-2　資本所得と労働所得の不平等、富裕国、2013 年頃

出典：ルクセンブルク所得研究データベース（https://www.lisdatacenter.org）

2.3　新たな社会政策

20 世紀の不平等解決策は 21 世紀の所得不平等には対応できない →①強い労働組合を作る・②大衆教育の拡大・③高い税金をかける・④政府による大規模な移転を行う

① 製造業からサービス業への転換、リモートワーク等により労働力が物理的に一箇所に集まらなくなり、労働組合（特に民間部門）の組織力が低下した

② 大衆教育により能力の均質化＝賃金平等化の効果が得られると期待されたが、教育年数には上限がある一方で、要求されるスキルの高さに限界はない

③,④ 高額納税者は税率の低い国へ出ていくので、国の税収が減る

2.3a　新しいツールの発見と新しい目的の設定の必要性

→ 資本とスキルの両方を国民全員にほぼ平等に授ける平等主義的な資本主義を目指す（資本とスキルの平等的分配）

資本の集中を分散させる方法

1. 中間層の金融資産を増やし、税制上の優遇を金持ち投資家以上に行う
2. 従業員持株制度 (ESOP) を導入し、労働者の資本保有を増やす
3. 相続性や富裕税をイデオロギー的な枠組みで捉え直す

▹ 相続財産に課税をし、その分を教育の無償化にあてること：リベラルの平等の本来的なシステム

▹▹ 誰もが同じ経済的・社会的階級関係なく政治的自由を持つ（ロールズの第一原理）

▹▹ 機会の平等（第二原理）

• 教育における平等：かつてのように教育水準を同等にすることを目指すのではなく、同等の教育を受けた人々における教育へのリターンを平等にすることが目指される

• 学校の質の不平等を解消すること、すなわち学校間の教育水準を平等にすること（公立学校の質の改善）

2.3b　グローバリゼーション時代の福祉国家

移民と福祉国家

• グローバリゼーション時代には、高度に発達した福祉国家ほど、スキルが低いか野心の低い移民を惹きつけるといった厄介な影響を被りかねない

• 受け入れ国の分布の高みにのぼれると期待できるために、移民は国の平均所得よりも不平等のほうを選ぶ。一方で、分布の低いところに来ると予想する悲観的もしくはスキルの低い移民には、平等なほうの国（セーフティーネットの発達した国）を選ぶ傾向にある

→ この悪循環にはかんたんな解決策はないが、以下の２つの主要な戦略は意味ある違いをもたらすことができるだろう

1. 移転の平等化につながる政策を進め、現在の所得の課税を引き上げ、福祉国家の規模を縮小できるようにすること
2. 移民の性質を根本的に変化させ、労働の一時的な移動ときわめて似たものにして、市民権とすべての福祉給付への無条件のアクセスにつながらないようにすること

2.4　上位層は自己永続的か

• 上位層を永続的に留まらせるためには政治を利用する必要がある

→ 具体的には政党や選挙活動への資金提供を通して、金持ちは民主的政治に介入する

▷ 金持ちは献金の見返り（有利な経済政策など）をつねに期待しているし、政治はそれに答えようとする（Cf. ヒラリー・クリントンとゴールドマン・サックスの関係）

▷▷ これらの資本家上位層はかつてのそれとは異なり「高学歴で、勤勉に働き、労働からかなりの割合で所得を得て、同類婚が多い」。「また子どもの教育にすこぶる熱心」である

▷▷▷ 高額の教育は結果的に優位をもたらし、結果として金持ちの権力は次世代に受け継がれ、強化される

• リベラル能力資本主義の頑強さ：上位層は下位層からでも成り上がることが可能とされており、部外者に開かれている

→ 新参者がいつでも上位層に挑戦できるという構造は、上位層支配の維持を筋の通ったものとする

3　政治的資本主義

政治的資本主義は、植民地化された社会で行われた共産主義革命の産物であることが多く、中国はその経済的、政治的な力から政治的資本主義の典型としてみなせる。政治的資本主義は、リベラル能力資本主義よりも国家や官僚の役割が大きく、その分腐敗も多いが、グローバル資本主義においては有利な点も多い。

3.1　共産主義の歴史的位置づけ

3.1a　マルクス主義的世界観とリベラルな世界観では共産主義の歴史的位置づけを説明できない

• マルクス主義やリベラル世界観はエルサレム＝目的論的

循環的（周期的に現れては消える）／目的論的（下位から上位へ進展していく）

＊アテナイ／エルサレムの分類（N. ベルジャーエフ＊近代的進歩主義の批判者）

• マルクス史観とリベラル史観における共産主義の役割 → リベラルなホイッグ史観（進歩／反進歩の対立で前者が常に勝利する歴史観）と唯物史観は「進歩」という点で共通する

【問題】（第三世界で）どうして社会主義経済構造が進歩史観的に劣る資本主義経済に退化したのか？

→（リベラル派もマルクス主義もこの問いにどちらも答えることができない）

• リベラル派の考え：『歴史の終わり』（F. フクヤマ）的に「資本主義が終着点だから」（社会主義がむしろ退化であった）＝ファシズムも共産主義も最終的にはリベラル能力資本主義に「進化」した

リベラル観の問題 ではなぜこの２つの主義が台頭したのか？（戦争が起きた原因を説明できない）→ リベラル派は 1914-1989 の間の時代をすっ飛ばしている

• マルクス主義の考え：ファシズムや戦争は「資本主義の最高の段階の結果」（カルテルや国家の独占状態を生み出した段階）

マルクス主義の問題 ではなぜ共産主義は先進国に広がらなかったのか？ 共産主義国は資本主義に戻ったのか？

• 共産主義を扱うことの難しさ（付録 A も参照）

▷ 政治的権力が集中すると経済的資源が収奪され、イノベーションが起きにくい（ダロン・アセモグル＋ジェイムズ・ロビンソン『国家はなぜ衰退するのか』）

▷▷ 国家の力は「包括的制度（皆が参加できる）＞収奪的制度（エリートのみ）なので中国はいずれ衰退する」という主張

▷▷▷ 共産主義制度について説明ができない（政治制度が集中しているのに経済が成長している中国）

3.1b　20 世紀の歴史において共産主義をどう位置づけるか

• 原始共産制→奴隷制→封建制→資本主義という西側発展経路（WPD, Western Path of Development）

▷ マルクス主義において、この経路を辿らないのはアジア的生産様式とソ連（小作農共同体から社会主義へ Cf. ザスーリチへの手紙）の二種類だけ

▷▷ 第三世界に対してはリベラルもマルクス主義も似たように、「先進国が後進国に未来の道を指し示す」（マルクス）という進歩的な味方をしている

• 共産主義とは、後進の被植民地国が封建制を廃止し、経済的政治的独立を回復し、固有の資本主義を築くことを可能にする社会システム

▷ 第三世界の歴史から見た共産制は封建制から資本制への移行システム（西洋におけるブルジョワジーの台頭と同じ位置

▷▷ しかし、グローバル資本主義は、第三世界を成熟した資本主義経済に変革することがほとんどできなかった（香港やシンガポールなど一部を除き）

▷ フェルナンド・カルドーゾらの従属理論、周辺-中心理論や構造主義理論は、事後的にそれを説明するものとなっている

▷▷ 第三世界を資本主義化させることを止めて社会主義経済を推進することを提案しなかった（この頃にはすでにソ連も衰退しつつあったので社会主義に移行するのも躊躇われた）

▷▷▷ 1920 年代の「東転」（Eastern Turn, 先進国での革命より反帝国主義闘争に焦点を当てる）が、後進社会への近代化への運動へ切り替えた

→ 実際は後進国を土着資本家経済に転換させる一歩となった

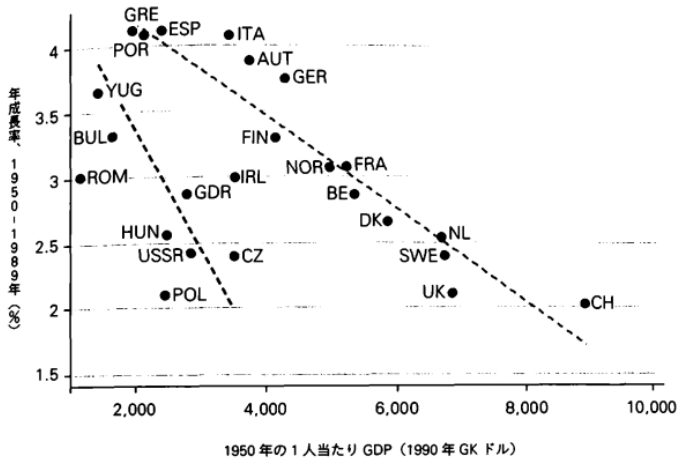
3.2　第三世界（の一部）が資本主義化するために、なぜ共産主義革命が必要とされたのか

3.2a　第三世界で共産主義革命が果たした役割

● 社会革命（支配的生産関係の変革）と民族自決（外国による支配を覆すこと）

3.2b　共産主義が成功したのはどこの国か

● マルクスに反して、社会主義は先進国では成功しなかった



→1950 年に比較的発展していた国ほど、その後の 39 年間の平均成長率が低かった

3.2c　中国は資本主義か

● 社会で生産の大半が民間所有の生産手段を行われ、労働者の大半が賃金労働者であり、生産や価格設定についての決断の大半が分散化されたかたちでなされているため、「資本主義」であると言える

3.3　政治的資本主義のおもな特徴

3.3a　３つのシステム的特徴と２つのシステム的矛盾

1. 優秀な官僚：テクノクラート（中国、ベトナム、マレーシア、シンガポール）
2. 法的拘束力の欠如（都合の悪い法律は無視できるし、支配者が恣意的に権力をふるえる）→ 鄧小平は現代の政治的資本主義の生みの親 → 北京のアダム・スミス（広い鳥かご）
3. 国家の自律性：国家が国益優先で民間部門を統制する力を持つこと

● 第一の矛盾：官僚は合理的システムの中で働くが (特徴 1)、法を恣意的に変えること (特徴 2) もできてしまう → 固有の腐敗
● 第二の矛盾：法に囚われない官僚が経済的利益を得るために不平等が加速する腐敗の存在と、統治を正当化するためには不平等を抑制する必要があるということ

3.3b　政治的資本主義のシステムを擁するのはどの国か

▷ 中国、ヴェトナム、マレーシア、ラオス、シンガポール、アルジェリア、タンザニア、アンゴラ、ボツワナ、エチオピア、ルワンダ
▷▷ 政治システムが（事実上でも）一党制であり、かつて植民地であったが独立を勝ち取った国々
▷▷▷ 中国が飛び抜けて政治的資本主義システムを推し進めており、他の国への輸出も売り込んでいる
● アメリカ的リベラル能力資本主義とはどのような違いがあるだろうか？（とりわけ不平等については）

3.4　中国の不平等についての考察

3.4a　不平等全体の拡大

● 経済が資本主義に向かうにつれて、賃金の不平等が明らかに拡大し、有能でスキルの高い労働者の賃金がスキルの低い賃金よりはるかに高くなった
▷ 資本所得が増加するにつれ、中国にも新たな階級が誕生している：「資本家階級（起業家）」、「新たな中間層（責任者や専門職）」、「旧来の中間層（小規模事業主）」
▷▷ これらの資本家階級は、国や政府官僚が大きいために、対自的階級（共通利益を追求する組織化された階級）よりも唯自的階級（即自的階級？）といえるかもしれない
→ ジャック・ジェルネによれば、宋時代の商人は、つねに国家権力の影響下にあり、利害を共有する意識の高い階級を築くことができなかった

3.4b　腐敗と不平等

● 政治的資本主義は法の支配が故意に柔軟な解釈がなされるため、支配者やエリートたちは横領に手を染めやすくなる
● 毛沢東時代の中国と比べても、腐敗の規模は拡大している → 鄧小平の改革は「巨大な不平等と堕落の一般化、社会の道徳的基盤の侵害」をもたらした（何清漣）

3.5　政治的資本主義の持続性とグローバルな魅力

3.5a　ブルジョアジーが中国を支配するのか

スミス的資本主義とマルクス的資本主義

● アリギによれば、中国は宋代から清代にかけてスミスに近い経路（マルクス的な不自然な経路とは異なる自然な資本主義の発展）を歩んできた → 国家（中央政府）が絶対的で、害を与えない限りで商人が商売をする（ジャック・ジェルネ、フランシス・フクヤマ）
● 中国では 2000 年近くも国家とビジネスのあいだに不安定で不平等な関係が存在してきた
▷ したがって中国の民主化についての問いは、こうした歴史の重みも考慮した通常とは異なるかたちで提示する必要がある
▷▷ 中国の資本家がこの国を支配するようになるのか、そしてその場合、彼らは代議制民主主義を自らのツールとして用いるのか

3.5b　中国は政治的資本主義を「輸出」するのか

● 行政が有能で、腐敗も許容できるレベルなら、民主主義的な国家よりも有利に働く点は見いだせる（とりわけインフラなどの公共政策において）
▷ 政治的資本主義には、権力を握る者にとって明らかに利点があり、市民のほうも長々と協議するより迅速な決断を好むかもしれない
▷▷ 事実、成功した資本主義では、問題が直接自分にかかわるものでない限り、市民は政治的動物とはならない

適度な腐敗を受け入れる

● 腐敗を常に厄災だと考えるのは間違いであり、多くの社会は多かれ少なかれ腐敗と共存しながら反映をしてきたし、一切の腐敗のないシステムよりも快適なものにしてきた
● 北欧諸国が上位に並ぶ政府の透明性ランキングを見て、この手の透明性をよその国にも簡単に適用できるとか、他国の国民が同程度の「透明性」を政府に期待できるなどと、考えるべきではない（フクヤマの言う国家の「家産制化」の力は根強い）

中国の政治的資本主義を他国に輸出できるのか

● 政治的な一党独裁の中央集権化と、地方の経済政策についての相当な自由裁量（分散化）が可能になるのは、中国の伝統によるものであり、それをモデルとして他の国に適用するのは容易ではないかもしれない

政治的資本主義が成功するための決定的要因

1. 政治と経済を切り離すことができるか
2. 国益に沿った決断を行える腐敗の少ない中央集権を維持できるか

→ どちらも困難であり、このシステムを他国に輸出したとしても経済的な成功は望めないかもしれない

4　資本主義とグローバリゼーションの相互作用

グローバリゼーションにおける資本と労働の移動性について目を向け、その「リターン」（レント・利潤）について考えると、グローバルなレベルで常態化した「腐敗」が現れる。倫理的に腐敗を断罪するのではなく、グローバリゼーションにおいて腐敗が不可避であると認め、偽善的であることを止めるべきである。

4.1　労働と移民

4.1a　市民権プレミアムまたはレントの定義

● その国に生まれただけで享受できる市民権プレミアムは「レント」（超過利潤）である（ただし市民権の場合は地代レントと異なり、土地を切り離すことができる観念的カテゴリーである）

4.1b　経済資産としての市民権

● 市民権は資産として市場取引の対象となりうる（ギリシャは 25 万ユーロ＝約 3000 万円からイギリスは 200 万ポンド＝約 3 億）
● 市民権には差異のあるカテゴリーが存在する
「サブ市民権」：アメリカの永住ビザなどをはじめ、一部制限（選挙権など）を除きほとんどの恩恵に預かることができる

▷ アラブ系のイスラエル市民は、イスラエルで得られる多様な権利や恩恵を得られると同時に、兵役といったコストを免除される「スーパー市民」

4.1c　生産要素の自由な移動

• 移民はグローバリゼーションによって可能になる → 移民を反対するためには、資本や労働の移動を阻み、グローバリゼーションそのものを否定することしかできない

移民反対派の別意見

• 文化的規範や言語、行動、部外者への信頼といった点で自国民と移民の間に軋轢が生じ、最悪内戦になる（文化的な問題）

4.1d　自国民の懸念と移民の希望との折り合いをつける

• 移民が永久にその国にとどまり、市民権のあらゆる恩恵を受ける可能性が低ければ低いほど、自国民が移民を受け入れる可能性は高くなる

• 移民に権利を与えなければ自国民は移民を受け入れるので、移民を一切認めないといった極端な選択を回避できる

→ 一方で、自国民に受け入れられない疎外感が広まり、底辺層が増えるおそれがある

4.2　資本とグローバル・バリューチューン

•GVC とは... 企業活動における業務の流れを工程・タスク単位で分割し、業務の効率化や競争力の強化を目指す手法

• リチャード・ボールドウィンによるグローバリゼーションの三つの時代：モノ、情報、人間の輸送コスト削減

1. 産業革命：一方で生産を行い、遠方の目的地で消費を行えるよう、輸送コストが削減された（第一のアンバンドリング＝分離）
2. ICT 革命：一方で生産の管理・調整を行い、他方で生産を行う（第二のアンバンドリング：情報コストの削減）

• 生産拠点が第三世界のオフショア拠点に移動し、「周辺」と「中心」の主体が逆転した（第二のグローバリゼーション）

• 究極のアンバンドリング：人間の輸送コストの削減（リモートワーク）

4.3　福祉国家——生き残るために

• 移民に多少なりとも市民権があたえられれば、それは現市民が受け取るレントが薄まることを意味するため、福祉国家と労働の自由な移動は対立してしまう（市民権プレミアムと反移民政策は連動している）

福祉国家を存続させるには

• 移民の経済的権利を削減する提案しかなくなる

左派政党と福祉国家

• 反グローバリゼーションを標榜する左派政党は、資本の流出や移民にも反対することで、ナショナリストで反インターナショナルという、既存の社会主義の伝統とは異なる存在となっている

→ 結果的に右派政党と政治的に似通ったものになる（ただし差別問題などは左派にインターナショナリズムの名残がある）

4.4 世界に広がる腐敗

4.4a グローバリゼーション時代における腐敗の三つの根拠

- 世界の腐敗は過去よりも増大している根拠は三つある

1. 人生の成功が経済的な成功によってのみ測られる超商業化ならびにグローバル化された資本主義（普遍的イデオロギー）
   - 経済的成功が優先された結果、道徳観念の欠けた社会（合法すれすれやちょっとした法の逸脱なら構わない）ex. ロビー活動
   - 毛沢東時代の中国で腐敗が少なかったのは、貧困やモノの欠如によって腐敗役人が買えるものがなかったこと、中国が孤立していたため、役人が海外にお金を移動できなかったため → 国がグローバル社会に統合されていないと腐敗による金儲けはできない
2. 法域間の金の移動を容易にし、よって盗んだ金の洗浄や租税回避を容易にする自由な資本勘定（腐敗を可能にする仕組み）
   - タックスヘイヴン（パナマ文書、パラダイス文書）
   - 寄付による道徳的資金洗浄
3. グローバリゼーションのデモンストレーション効果（特定の集団に当てはまる）
   - 「隣のやつらに遅れをとるな」
   - 賄賂は貧困国に生まれた不公平な運命を埋め合わせるもの（市民権ペナルティを持つ者にとって当然の所得であり、罪悪感は強くない）

4.4b 腐敗を抑えるために今後もおそらくほぼ何もなされないのはなぜか

答え グローバル資本主義のシステムにがっちり組み込まれているから

> 私たちは増えつづける腐敗に慣れ、これをグローバリゼーション時代の理にかなった（ほぼノーマルな）収入源として扱うほかないだろう。その性質上、合法的なものにはついぞならないだろうが［…］それはすでに常態化され、この傾向は今後もさらに進むだろう。また私たちは自分たちの偽善的な考えを認め、腐敗の善悪を論じたり貧しい国を脅したりするのもやめるべきだ。富裕国の多くの人間が腐敗の恩恵に浴しているし、今日私たちが経験するグローバリゼーションが、それを不可避のものにしているのだから。

5 グローバル資本主義の未来

資本主義は、私達の私的領域にまで浸透しはじめ、自由時間や個人財産、親戚との関係や結婚のパターン諸々に影響を与えている。それが資本主義全体のピークなのか、資本主義的関係がさらに拡大していくかはまだわからない。最後にミラノヴィッチが予想できる資本主義の未来を述べている。

5.1　超商業化資本主義では道徳観念の欠如が避けられない

5.1a　マックス・ヴェーバーの資本主義

● ヴェーバー「社会システムは、そこに帰属する市民たちが抱くようになる欲望と希求を形作る。彼らが現にどのような人であるのかだけではなく、どのような人になりたいと望むのかも、社会システムが部分的にではあれ決めてしまう」
→ プロテスタンティズム（宗教）や社会契約が、富の消費に対する礼儀や道徳の崩壊を抑制していた

5.1b　道徳のアウトソージング

● グローバル資本主義では道徳的な価値観は宗教や社会契約といった内なる行動規範では抑制できなくなる
● 道徳は、外部の「法」に**アウトソージング**されている
● 内的行動規範がない以上、法の抜け穴を探るようになるのは必然

5.1c　「代わりはない」

● 商業化した資本主義の欠点とおぼしきものを緩和すべく、近年多くの提案がなされているが、そのどれもが間違っている
▷ のんびりした暮らしをしていても、お金が底をついたらそこまでだし、余暇を過ごそうとする親のせいで一流校にも通えず、デジタル機器も買えない子どもは腹を立てるだろう
▷▷ 自分たちの快適なライフスタイルに満足したところで、より豊かな外国人たちが自分たちの土地や不動産を買い始め、暮らすようになる（ex. イタリアのヴェネツィア）
▷▷▷「もっと余暇が必要だなどと語る人びとはわかっていないのだ。この世界の社会という社会が権力を賛美するようつくられていて、商業化された世界では成功と権力をあらわすのはお金だけで、お金とは労働、資産の保有、とりわけ腐敗によって獲得されるということを。」（221）

5.2　原子化と商品化

5.2a　家庭の利用価値が下がる

▷ 原子化とは家族の終焉であり、個人が一人で生きていけるようになる状態
▷▷ これまで家庭で「無償」で行われてきた食事や洗濯などの家事や庭仕事、介護などが市場で買えるようになってきた
▷▷▷ 豊かでさえあれば、あらゆる活動をアウトソージングすることが可能となり（電気代や家賃も共有しなくて良い）、他者と人生を共有する必要性がますます減っていく

5.2b　日常の資本主義としての個人の生活

▷ これまで家族や友人、地域社会が持ちつ持たれつでやってきた活動を消費者としてお金で買えるようになった（**原子化を促す商品化**）
▷▷ 以前は商品でなかったものが商品化されることで誰もが多くの仕事に就けるようになり、自宅を貸すことで日常的な資本家になることもできたが、それは労働市場が完全にフレキシブルなものとなり、労働者が誰とでも交換可能な「代理人」になったとも言える

▷▷▷ 私的領域の商品化とは超商業化資本主義の最高点である

5.2c　資本主義の覇権

• 資本主義が私たちの私的生活に入り込むことで、これまでの規範意識や共同体の価値観が利己心に取って代わり、半端な真実、偽善がはびこるようになった

5.3　技術進歩に対する根拠のない不安

5.3a　労働塊の誤謬と私たちが未来を思い描けないこと

1. ロボットなどの新たな機械は労働者の仕事を奪い、賃金が下がる場合もある→正しいが、社会全体に影響を及ぼすには至らない
2. 人間のニーズは限られている→ニーズも無限であり、技術がどう進歩するかは誰にも予想がつかないため、新たなニーズがどんなかたちを取るかさえ私たちは予想もつかない
3. 原材料資源には限りがある→ X がやがて尽きるエネルギー源であれば、それに変わるエネルギー源に応用したり、別の動力の組み合わせを考えるようになる

5.3b　ユニバーサル・ベーシックインカムの問題点

• 大規模な失業の恐怖に対する反応として UBI という発想が注目されるようになった（全市民に、無条件で現金を継続的に支給する）

問題 1. UBI の経験が小規模で不足している

問題 2. コスト

問題 3. 福祉国家の理念の変更（UBI はリスクに備えた社会保険ではない）

問題 4. 左派は UBI が最高所得に制限を設け、不平等の抑制をすると考え、右派はその反対を考える→労働にどんな影響を与えるかがわかっていない

5.4　豪奢で快楽に満ち (Luxe et Volupté)

5.4a　二つのシナリオ——戦争と平和

• グローバルな核戦争の可能性：過去の世界大戦における経済状況と戦争の強い結びつき
• グローバル資本主義のおかげで技術開発が全世界に拡散されているため、人類が滅亡しない限りは技術的な損失は少ない

5.4b　政治的資本主義 vs リベラル資本主義

• グローバリゼーションの三種類の進化（サミュエル・ボウルズ、ハーバート・ギンタス『民主主義と資本主義』

1. 新自由主義（西側主導のリベラル能力資本主義）
2. 新ホッブズ主義（≒政治的資本主義）
3. 資本を民主主義的に組織化された企業に貸し出す不労所得者の社会

→ 人口の伸びが止まり、資本が余るほどに増えたとき、資本が労働を雇うのではなく、労働が資本を雇う社会の可能性がある

5.4c　グローバルな不平等と地政学的変化

• 中国やタイ、インドネシアなどのアジア諸国の所得水準が欧米諸国の水準に近づいていき、産業革命以前の所得水準の相対的な均衡状態に回帰する
• アフリカの未来

5.4d　おわりに——本書が導くかもしれない社会システムについて

現状の三つのタイプの資本主義

- 古典的な資本主義：個人間の不平等差は相変わらず大きく、富の優位性は世代間で継承される
- 社会民主主義的な資本主義：個人間の不平等は中程度であり、教育にも比較的平等にアクセスできることから世代間の所得移動性が確保される
- リベラル能力資本主義：高い資本所得と労働所得を同時に持つことで、個人間の不平等が拡大していく。再分配はされるが、金持ちはより高い教育や医療を選択するため、社会的分離主義が重みを持ってくる。世代間移動性は低い

二種類の仮説上の資本主義

1. 民衆資本主義：所得自体に差はあるが、誰もが資本所得と労働所得をほぼ等しい割合で得ている。個人間の不平等の拡大は起きず、世代間の所得移動性も確保される
2. 平等主義的資本主義：誰もが資本所得と労働所得を等しい量で受け取り、個人間の不平等もない。再分配における国の役割は社会保険のみに限られる（リバタリアニズム・資本主義・社会主義）

四つの具体的政策

1. 中間層の金融・住宅資産に税制上の優遇措置を設け、富裕層を増税→富裕層の富の集中を減らす
2. 所得分布下位 30%の人々も利用できる程度までに公教育の費用を軽減すべく、予算を増やし、さらに質も改善する→世代間の優位性の継承を減らし、機会の平等化を目指す
3. 市民と非市民の分断を終わらせる「軽い市民権」の導入（ナショナリストの反発を招くことなく移民を認める）
4. 政治献金を規制する（富裕層が政治プロセスを牛耳らないようにする）

あるいは... リベラル資本主義と政治的資本主義が収束するシナリオ
→ 金権政治が強まれば、政治的資本主義に似通ってくる

補遺：本書の目次

目次

1 冷戦後の世界のかたち 1

2 リベラル能力資本主義 2

2.1 リベラル能力資本主義の特徴 2
2.2 システム的な不平等 2
2.3 新たな社会政策 3
2.3a 新しいツールの発見と新しい目的の設定の必要性 3
2.3b グローバリゼーション時代の福祉国家 4
2.4 上位層は自己永続的か 4

3 政治的資本主義 4

3.1 共産主義の歴史的位置づけ 4
3.1a マルクス主義的世界観とリベラルな世界観では共産主義の歴史的位置づけを説明できない 4
3.1b 20 世紀の歴史において共産主義をどう位置づけるか 5
3.2 第三世界（の一部）が資本主義化するために、なぜ共産主義革命が必要とされたのか 6
3.2a 第三世界で共産主義革命が果たした役割 6
3.2b 共産主義が成功したのはどこの国か 6
3.2c 中国は資本主義か 6
3.3 政治的資本主義のおもな特徴 6
3.3a ３つのシステム的特徴と２つのシステム的矛盾 6
3.3b 政治的資本主義のシステムを擁するのはどの国か 7
3.4 中国の不平等についての考察 7
3.4a 不平等全体の拡大 7
3.4b 腐敗と不平等 7
3.5 政治的資本主義の持続性とグローバルな魅力 7
3.5a ブルジョアジーが中国を支配するのか 7
3.5b 中国は政治的資本主義を「輸出」するのか 8

4 資本主義とグローバリゼーションの相互作用 8

4.1 労働と移民 8
4.1a 市民権プレミアムまたはレントの定義 8
4.1b 経済資産としての市民権 8
4.1c 生産要素の自由な移動 9
4.1d 自国民の懸念と移民の希望との折り合いをつける 9
4.2 資本とグローバル・バリューチューン 9
4.3 福祉国家——生き残るために 9
4.4 世界に広がる腐敗 10
4.4a グローバリゼーション時代における腐敗の三つの根拠 10
4.4b 腐敗を抑えるために今後もおそらくほぼ何もなされないのはなぜか 10

5 グローバル資本主義の未来 10
5.1 超商業化資本主義では道徳観念の欠如が避けられない 11
5.1a マックス・ヴェーバーの資本主義 11
5.1b 道徳のアウトソージング 11
5.1c 「代わりはない」 11
5.2 原子化と商品化 11
5.2a 家庭の利用価値が下がる 11
5.2b 日常の資本主義としての個人の生活 11
5.2c 資本主義の覇権 12
5.3 技術進歩に対する根拠のない不安 12
5.3a 労働塊の誤謬と私たちが未来を思い描けないこと 12
5.3b ユニバーサル・ベーシックインカムの問題点 12
5.4 豪奢で快楽に満ち (Luxe et Volupté) 12
5.4a 二つのシナリオ——戦争と平和 12
5.4b 政治的資本主義 vs リベラル資本主義 13
5.4c グローバルな不平等と地政学的変化 13
5.4d おわりに——本書が導くかもしれない社会システムについて 13